

ロシア語の主格名詞句をめぐる

匹 田 剛

0. はじめに¹

ロシア語には、しばしば注目される定動詞節 (finite clause) の主格主語以外にも様々な主格名詞句が現れる。それらに付与される主格を説明するために、生成文法理論の流れの中で、過去いくつかの主格付与の方法が提案されているが、それらがロシア語の全ての主格名詞句に対する格付与を説明することに成功しているわけではない。

本稿の目的は、ロシア語に見られる各種の主格名詞句を観察し、先行研究の不十分な点を指摘するとともに、ロシア語の主格名詞句の分布を包括的に説明できる方法を提案することにある。

以下、第1節では2つの先行研究を概観し、第2節ではロシア語の各種の主格名詞句を観察・考察した上で先行研究で提案されたそれぞれの主格付与のルールが何を説明でき、何を説明できないのかを明らかにし、それらに変わる新たなものを提案する。また第3節では本稿では未だうまく説明がなされていない、残された問題点を見る。

¹ 本稿のグロスで用いた略記は以下の通り:

NOM.=主格, GEN.=生格, DAT.=与格, ACC.=対格, INS.=造格, LOC.=前置格, M.=男性, F.=女性, N.=中性, SG.=単数, PL.=複数, PR.=現在時制, PA.=過去時制, FU.=未来時制, IMP.=命令法, INF.=不定動詞, ADJ-PART.=形動詞, ADVPART.=副動詞, 1.=1人称, 2.=2人称, 3.=3人称。なお、グロスに示したのは議論にとって必要と思われる特徴のみである。語の持つ全ての文法特徴を記したわけではない。また必要に応じて名詞の文法性などもグロスに併せて記してある場合もある。

1. 先行研究

本節では、過去生成文法理論の中で提案されてきた2つの主格付与の方法を概観する。なお、1つ目のChomsky (1981)におけるものは一般理論として提案されたものであり、それに対して2つ目のBabby (1986)のものは、一般理論を射程に入れながらも、ロシア語の主格付与を説明するために提案されたものである。

1.1. Chomsky (1981)

Chomsky (1981: 170)では、格理論の一部として主格を付与するために以下のようなものが提案されている：

(1) NP is nominative if governed by AGR.

(NPはAGRに統率されていると主格になる。)

これにより、例えば以下のような定動詞節中の *I* には主格が与えられる一方で非定動詞節 (non-finite clause) 中の *John* には格が与えられず、それ故格フィルターによって排除され非文となることが説明される。

(2) I wonder [PRO/ *John to do].

しかし、第2節で明らかにされるように、この定式化だけでは説明が付かない主格の分布がロシア語では多数見られる。

1.2. Babby (1986)

Babby (1986) と Chomsky (1981) の大きな違いは、Chomsky (1981) は一般理論として普遍的な説明を主眼においているのに対して、Babby (1986) は一般理論を射程に入れながらも、その提案の最大の目的をロシア語の現象の説明としていることである。Chomsky (1981) は一般理論としながらもどうしても英語中心になりがちで、個別の言語の説明となると不十分な点が多く見られる。それに対して、ロシア語を主たるターゲットとしている Babby (1986) は Chomsky (1981) が説明できない多くの点をも説明することが可

能である。Babby (1986: 210) が提案する主格付与のルールは以下の通り：
 (3) A noun phrase that is not governed by a lexical category is assigned the nominative case.

(語彙範疇に統率されていない名詞句は主格を付与される。)

この方法は、次節で示されるように、Chomsky (1981) が説明できないロシア語の主格の分布を説明することができる。しかしながら、逆に Chomsky (1981) が説明できた現象が説明できなくなると言うジレンマに陥ってしまうのである。

以下、次節では、ロシア語に見られる主格名詞句をそれぞれについて考察し、新たな主格付与規則を提案する。

2. ロシア語の主格付与

前節では、2つの主格付与規則、(1)と(3)を見た。

- (1) NP is nominative if governed by AGR.
 (3) A noun phrase that is not governed by a lexical category is assigned the nominative case.

本節では、ロシア語に見られるそれぞれの主格名詞句を考察し、上述の2つの主格付与規則が、ロシア語の主格の分布の何を正しく予測し、何を予測できないかを見、そしてそれら全てを説明できるような新たな規則を提案する。

2.1. 主格を与えられるべき名詞句

主格付与規則が正しく機能しているということは、(i) 主格名詞句に正しく主格が付与されているということ、(ii) 主格を与えられてはいけない名詞句に主格が付与されないこと、の2点を満足させなければならない。

ここではまず最初に、ロシア語で主格が付与されなくてはならない名詞句を概観し、それぞれに上記の格付与規則(1)と(3)が正しく機能しているかどうかを見る。

2.1.1. 主格主語

いわゆる定動詞節の主語は主格を与えられ、その際、動詞は主格主語と非過去時制では人称と数、過去時制では性と数において一致を示す。

- (4) Я читаю. книгу.
I-NOM. read-PR.1.SG. book-ACC

「私は本を読んでいる。」

- (5) Он читал книгу.
he-NOM. read-PA.M. book-ACC.

「彼は本を読んでいた。」

この様な定動詞節の主語に与えられた主格を上述の主格付与規則(1)と(3)はどちらも問題なく説明しているように見えるが、Chomsky (1981) に関しては問題が残る。例えば、等位接続された名詞句が主語となっている場合、動詞の示す一致がロシア語では2通りあり得る。

- (6) Зима, весна и дождливое
winter-NOM.F. spring-NOM.F. and rainy-NOM.N.

лето прошли и боях
summer-NOM.N. pass-PA.PL. in battle-LOC.

「冬、春、そして雨がちの夏が戦いの中で過ぎ去った。」

- (7) Пропала контурность, выпуклость
Disappear-PA.F. contour-NOM.F. clearness-NOM.F.

земных предметов.
earthly-GEN.PL. object-GEN.PL.

「地上にあるものの輪郭と明瞭さが消失した。」

例文(6)では、動詞は等位接続された主語名詞句[_{NP} зима, весна и дождливое лето]全体と一致しており、複数形を示しているのに対して、例文(7)では[_{NP} контурность, выпуклость земных предметов]全体のうち第一要素のみ、すなわち、контурность に動詞が一致して女性形を示している。このような2種類の一致の可能性が Chomsky (1981) の考え方とは矛盾する。Chomsky

(1981:211) は主語と動詞の一致を説明するために以下のように述べている:

(8) AGR is coindexed with the NP it governs.

(AGR はそれが統率する名詞句と同一指標になる。)

ここで重要なことはこの考え方に従えば、主格の付与と主語と動詞の一致は一対一に対応しているということである。ところが上の例から明らかなように、少なくともロシア語においては主格付与と一致は一対一に対応していない。この考え方に従う限りロシア語の主格主語の説明はできないわけである(詳しくは匹田 1995 参照)²。

その点、一致と主格付与を切り離して考える Babby (1986) の定式化は矛盾を生じないことになる³。

ただし、Chomsky (1981) に関しては、上述の(1)と(8)を別個のものとして考えることも可能である。もし、(8)が無ければ(1)は主格主語に対する格付与を説明できていることになる。

2.1.2. 主格述語

ここで論ずる主格述語とは連結動詞の述語名詞句のうち主格で現れるものを指す。ロシア語の連結動詞 *быть* の述語は造格で現れる場合と主格で現れる場合があるが、主格の場合、様々な奇妙な特徴を示し、それがなぜ主格になるのかしばしば問題になり⁴、いくつかの説明が過去試みられてきた。

² これはいわゆる GB 理論における考え方であるが全てを Spec-head の一致において説明する Minimalist Program の考え方でも同様の矛盾が生じる。Chomsky (1993:7) に以下のような論述が見られる:

“We now regard both agreement and structural Case as manifestations of the Spec-head relation.”

(我々は一致と構造格を Spec-head の関係が現れたものであると見なす。)

³ ただし、この場合主格付与とは別個に一致の規則をたてなければならないわけであるがそれにはさらなる議論が必要である。

⁴ 主格と造格の意味的な違いに関して、例えば、Кохтев Розенталь (1984) は、造格が「一時的な (временный) な」性質を表すのに対して、主格は「恒常的な

- (9) Таня была студенткой.
Tanja-NOM. be-PA. student-INS.

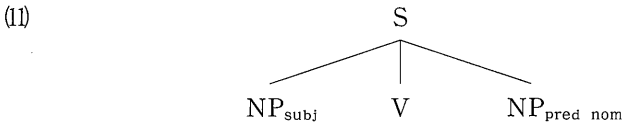
「ターニャは学生だった。」

- (10) Я ϕ студент.
I-NOM. be-PR. student-NOM.

「私は学生だ。」⁵

主格の形式的側面の説明の1つ目は、АНСССР(1970, 1980)や Barnetová (1979)などに見られる、述語の主格は主語との格における一致によって得られるとしているもの、2つ目は Иомдин (1990) や Rappaport (1986) が主張する、動詞が統率する述語名詞句に造格のみならず主格をも付与する能力があるとする考え方である。それに対して本稿では3つめの Babby (1980, 1986) の考え方を採用する。

Babby (1980, 1986) の考え方は、以下のような、述語が主語と sister となるような構造を想定し、主語と同じ規則によって述語にも主格を付与しようと言うものである。(Babby 1980: 171-172)



このような構造を想定することによって、確かに上述の(3)、そして一致に関わる(8)さえ考慮に入れなければ(1)によっても、述語に主格が与えられることになる。それでは、一致による説明、統率による説明に比べて、この第3の考え方には根拠があるのであろうか。以下にその概略の理由を示す(詳しく

(постоянный)」性質を示すとしている。ただし、Chvany (1975) や Barnetová (1979) によればこのような差異は現代ロシア語では無意味なものであり、実質文体的な差に過ぎないと主張している。

⁵ ロシア語では連結動詞 *быть* は現在時制において通常 ϕ で現れるとされるが、問題が無いわけではない。この問題については3.2.を参照。

は匹田 1994 を参照)。

第 1 点は主格主語の存在しない従属節における主格述語の問題である。ロシア語の主格述語は、同時に主格主語が存在していない節、すなわち、副動詞節、形動詞節、不定動詞節等の非定動詞節では現れない。

(12) 副動詞節

- a) * [Будучи наступающий врач], Петров
 be-ADVPART. genuine-NOM. doctor-NOM. Petrov-NOM.

не мог поступить иначе.
 not could act-INF. else

- b) [Будучи настоящим, врачом,] Петров
 be-ADVPART. genuine-INS. doctor-INS. Petrov-NOM.

не мог поступить иначе.
 not could act-INF. else

「ペトロフは真の医師なので他にやりようがなかった。」

(13) 形動詞節

- a) *Петров, [бывший в ту пору
 Petrov-NOM. be-ADJPART.NOM. at that time

врач] , принял решение оперировать
 doctor-NOM. accepted decision-ACC. operate-INF.

раннего.
 injured-ACC.

- b) Петров, [бывший в ту пору
 Petrov-NOM. be-ADJPART.NOM. at that time

врачом], принял решение оперировать
 doctor-INS. accepted decision-ACC. operate-INF.

раннего.
 injured-ACC.

「当時医者だったペトロフは負傷者に手術を行うことを決心した。」

(14) 不定動詞節

a) * [Чтобы быть настоящим врачом] нужно
 in order be-INF. genuine-NOM. doctor-NOM. necessary

любить людей.
 love-INF. people-ACC.

b) [Чтобы быть настоящим врачом], нужно
 in order be-INF. genuine-INS. doctor-INS. necessary

любить людей.
 love-INF. people-ACC.

「真の医師であるためには人間を愛する必要がある。」

この現象は Иомдин (1990) の統率説に対する最大の反例となる一方⁶、一致説、Babby (1980) で想定した構造(11)の両者に対する論拠となりうるものである。しかし、他の例を観察すると、主格述語は形式的にある種の「主語的特徴」を示しており、Babby (1980) のような主格主語と主格述語を形式的に同列に扱う考え方が、統率説だけでなく一致説と比べても、もっとも妥当とするべきであることがわかる。

ロシア語の主格述語が示す、「主語的特徴」として、形動詞 (adjectival participle, причастие) が修飾する主要部名詞 (head noun) の振る舞いがある。通常、形動詞の修飾する主要部名詞はその論理的な主語になる。

(15) Она любит студента, читающего много
 she-NOM. loves student-ACC. read-ADJPART.ACC. many

книг.
 books

「彼女はたくさん本を読む学生が好きだ。」

この場合形動詞が修飾している主要部名詞 *студента*「学生」は動詞 *читать*

⁶ この反例に対して Иомдин (1990) は十分な反論を行っていない。このことは支配説を提案する Иомдин (1990) の問題点の一つである。

「読む」から派生した形動詞 *читающего* の論理的な主語である。ところが、連結動詞 *быть* から派生した形動詞は論理的な主語と論理的な述語の両者とも主要部名詞として修飾することが可能である。

(16) 論理的な主語の場合

[_{НР}БЫВШИЙ. врачом человек]
be-ADJPART.NOM. doctor-INS. person-NOM.

「医師だった人」

(17) 論理的な述語の場合

[_{НР}БЫВШИЙ врач
be-ADJPART.NOM. doctor-NOM.

「かつての医師」

ここで *врач* 「医師」が論理的な述語であるが、(16)とは異なり(17)ではそれが形動詞に修飾される主要部名詞として機能しており、この点において連結動詞 *быть* では主格主語と主格述語が形式的に同列に扱われていることがわかる。これは支配説はもちろん、一致説でも説明が付かない現象である。

また、ロシア語では通常、動詞が主語に性、数、人称において一致を示すが、連結動詞 *быть* は時として述語名詞句と一致することがあることを報告されている (АН СССР 1970 : 555)。

(18) Его спокойствие было/была лпчина.
his calmness-NOM.N. be-PA.N./F. pretense-NOM.F.

「彼の平静さは見せかけだった。」

(19) Кабинет был/была большая комната.
office-NOM. M. be-PA.M./F. big-NOM.F. room-NOM.F.

「オフィスは大きな部屋だった。」

例文(18), (19)において、動詞はそれぞれ2つの形式が示してあるが、前者は主格主語と一致した形、後者は主格述語に一致した形である。この点においても、主格の述語名詞句に主語的な特徴が現れており、このことも統率説でも一致説でも説明が付かない現象である⁷。

以上のように、主格述語はいくつかの点において主語的な特徴を示しており、主格述語を説明するには(11)のような主語と述語を同列に扱う構造を想定するのがもっとも適切であると思われる。それではこのような構造を想定した場合、格付与の規則はどう考えるべきであろうか。適切な名詞句に主格を付与するためには、Babby(1986)の規則(3)は、いかなる語彙範疇にも統率されていない主語、述語両者に主格を付与するにあたって全く問題ない。また、Chomsky(1981)の規則(1)も仮に一致に関わる(8)を考慮に入れなければ、主語、述語のどちらもAGRに統率されていると考えられるので問題ないことがわかる。

2.1.3. 左方転移化要素

ロシア語のいわゆる左方転移(left-dislocation)化要素は移動によるものとは考えられない。それは基底部で文頭の位置に生成されたものと見なされなければならない⁸。その理由は、大きく分けて以下の通りである(匹田1993)。

第一は格の問題で、左方転移化要素は主格で現れ、それと同一指示になる代名詞的要素は文のシンタックスに求められる格形で現れる、という点である。

- (20) Мария₁ — я ee₁ люблю.
 Marija-NOM. I-NOM. she-ACC. love-PR.1.SG.

「マリヤは私が愛している。」

ここで、文頭の *Мария* が左方転移化要素で文中の代名詞と同一指示になっている。左方転移化要素は主格形であるが、代名詞は対格である。もし仮に左方転移化要素が文頭の位置に移動してきたものであり、代名詞はその痕跡が具現化したものであると考えると、1つのCHAINが複数の格を持つこと

⁷ ただし、動詞の主語を何とするかを形式的に正確に定めるための規則を作らなければいけない、という問題は残る。残念ながら筆者は、動詞が主格述語と一致している例をインフォーマントによって確認することはできなかった。

⁸ それ故、匹田(1993)では移動を含意する「左方転移化要素」という移動の存在を含意する用語を用いずに、「強トピック」と呼んだ。

になってしまう。これは Chomsky (1986) における 1 つの CHAIN は 1 つの格のみを付与されると言う考え方に反することになり、移動という考えは理論的に排除されることになる。

第 2 に、Hikita (1992) で明らかにされたように、一般にロシア語においては、(21) のように時制従属節からの移動による要素の外置は認められないにも関わらず、(22) のような従属節の内部と外部を関係づけた文が可能である。

- (21)* Книгу_i Наташа сказала, что Таня читает е_i.
book-ACC. Natasha said that Tanja-NOM. reads

「ナターシャはターニャが本を読んでいると言った。」

- (22) Телевизоры_i — я знаю, [что в этом магазине
televisions-NOM. I-NOM. know that in this shop-LOC.

их_i много].
they-GEN. many

(Comrie 1973)

「テレビはこの店にたくさんあることを私は知っている。」

例文(22)では従属節内部の *их* と文頭の左方転移化要素 *телевизоры* が関係付けられている。このことから左方転移が移動とは異なる特徴を示していることがわかる。

第 3 は前置詞句の問題である。一般にロシア語では前置詞句からの移動による外置が行われる場合、移動する要素は必ず前置詞を伴って動かなければならない (Hikita 1992)。

(23)

- a) Он живет [PP с красивой женщиной].
he lives with beautiful woman-INS.

「彼は美しい女性と暮らしている。」

- b) *Красивой_i он живет [PP с е_i женщиной].

- c) *Женщиной_i он живет [PP с красивой е_i]

- d) C_i красивой_j он живет [PP е_i е_j женщиной].

- e) C_i женщиной_j он живет [PP е_i красивой е_j].

ここで、(a)は基底部語順と考えられるものである。(b), (c)では前置詞句内の要素を文頭に移動させているが、前置詞を伴っていないので非文となっている。それに対して、(d), (e)では移動に前置詞が伴っているのでその移動は認められているのである。

しかしながら、左方転移化要素はそのような制約に関わらず、前置詞句の内部の要素と関連づけられることが可能である。

- (24) Татьяна Михайловна₁ — все [про ней₁]
Tat'jana Mixajlovna-NOM. everyone about she-LOC.

хорошо знают.
well know

「タチヤナ・ミハイロブナについてはみんなよく知っている。」

当然この場合、文頭の左方転移化要素は前置詞を伴っていない。このことから左方転移化要素は移動によって生成されたものではないことがわかる。

また、基底部での生成を裏付ける根拠となる例が Земская(1973)にも報告されている。まず、文頭の主格名詞句と同一指示にならなければいけないものは代名詞とは限らず、以下のような一般名詞が現れることもある。

- (25) Сестра₁ — сестре₁ написал муж.
sister-NOM. sister-DAT. wrote-PA.M. husband-NOM.

「姉には夫が手紙を書いた。」

このような例があることを考えると、同一指示の代名詞が移動により生じた痕跡の具現化したものであるとの考え方は成り立たない。

さらには関係する名詞句が一切存在しないものすら報告されている。

- (26) Ты обедай один.

「あなたは一人で昼食をとりなさい。」

А чай — подожди меня.
but tea-NOM. wait-IMP. I-ACC.

「でも、お茶は私を待っていないさい。」

それでは、この移動によらずに基底部で生成されたと考えられる左方転移

化要素は、構造上どの位置にあると考えなければならないのであろうか。左方転移化要素とそれに関係する代名詞の結びつきが Chomsky (1981: 188) にある束縛理論の一項目である(27)に違反していないためには S (=IP) の外側に左方転移化要素が存在する必要がある。

(27) A pronominal is free in its governing category.

(代名詞類はその統率範疇内で自由である。)

このことはかき混ぜによるトピックが左方転移化要素の前に置かれると非文となることから結論づけられる⁹。

(28)* Завтра хорошая студентка_i — я ee_i
tomorrow good student-NOM. I-NOM. she-ACC.

буду видеть.
will-1.SG. see-INF.

「明日は私はその優秀な女子学生に会うだろう。」

例(28)では、*завтра*「明日」がかき混ぜによって文頭に前置された要素である。

ここでは、左方転移化要素の正確な位置を割り出すことはできないが、重要なのは S の外にそれがあると言うことである。S の外にあると言うことは AGR に統率されないことになり、Chomsky (1981) が提案する規則(1)では主格の付与が説明が付かない。もちろん、移動でないと考えられる以上、CHAIN を通じて格を与えられていると考えられないし、またその通り、同一指示の代名詞と左方転移化要素は異なる格を示しているのである。

その一方で、Babby (1986) が提案する規則(3)は S の外側にある何ものにも統率されない名詞句に対して主格の付与を正しく説明していることになる。

2.1.4. КАК + NOM.

直喩表現を構成するために、*как*「～のように、のような」という語がある。

⁹ 匹田 (1993) ではかき混ぜは S へのチョムスキー付加 (Chomsky-adjunction) であると結論づけた。従って、より正確に言えば、最も上位の S の外側である。

- (29) Я люблю тебя, как брата.
I-NOM. love-PR. you-ACC. as brother-ACC.

「私はあなたを兄弟のように愛している。」

- (30) Я бы хотел иметь такого ученика, как
I-NOM. would like have-INF. such pupil-ACC. as

он.
he-NOM.

「私は彼のような生徒が持ちたい。」

これらに関する形式的な観点からの研究として Rappaport (1986) があるが、ここでは、*как* の補語¹⁰ は(29)のようにそれが比喩する名詞句 (*тебя*) と同じ格が与えられている場合と、(30)のようにそれが比喩する名詞句 (*такого ученика*) に関わらず主格が与えられている場合とがあるとされている。当然、本稿で問題となるのは(30)のような場合なぜ主格が与えられるのかという問題である。

Rappaport (1986) では、*как* の補語が比喩する対象を結合対象 (linkage target) と呼び、それは結合領域 (linkage domain) の中に無ければいけないと主張する。結合領域は以下のように定義される。(Rappaport 1986:262)

- (31) A category C is in the linkage domain of *как* phrase K if and only if:
- a. The first S' node dominating K must also dominate C ;
 - b. If C is an argument of a lexical category, or is contained in such an argument, then any maximal projection dominating C must also

¹⁰ *как* は伝統的には接続詞として扱われてきたが、Rappaport (1986 : 274) はこれを前置詞として扱っている。

In its function of expressing simile, *как* is best treated as a maximally unconstrained preposition. It assigns no case, and can take complements of any of the following categories: NP, PP, AdvP, and S'.

(その直喩を表現する機能において、*как* は制限が最大限に緩やかな前置詞として扱うのが最も適当である。それは格を与えず、NP, PP, AdvP そして S' を補語としてとることができる。)

dominate K.

(範疇Cは以下の条件を満たし、またその場合に限り *как* 句Kの結合領域となる。:

- a. Kを支配する最初の節点S'がCも支配している。
- b. Cが語彙範疇の項であるかまたはそのような項に含まれているのならば、Cを支配する全ての最大投射がKも支配している。)

また、*как* の補語の格表示に関して、(Rappaport 1986:275)

(32) The complement of *как* must include whatever marker of semantic function the linkage target carries.

- a. If the linkage target is a nominal argument, the case serves as this marker.
- b. If the linkage target is a PP argument, the preposition itself serves as this marker.

(*как* の補語は以下の場合結合対象が持つ全ての意味機能標識を含んでいなければならない。

- a. 結合対象が名詞の項であり、格がその標識の役割を果たしている場合。
- b. 結合対象がPPの項であり、前置詞自体がその標識の役割を果たしている場合。)

(33) If the linkage target is not an argument, then only a looser, categorial match between the complement of *как* and the linkage target is imposed. An NP linked with a non-argument(N') takes the unmarked nominative case.

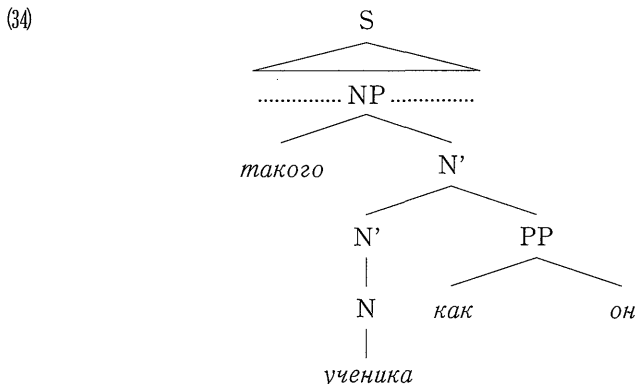
(結合対象が項でなければ、*как* の補語と結合対象の間の範疇的対応はより緩やかになる。項以外のもの(N')を結合対象としているNPは無標の主格を与えられる。)

としている。すなわち、結合対象から格を受け取れるのは、結合対象がNPあるいはPPのようなargumentの場合のみで、N'のような範疇が結合対象の

場合、格を受け取れず、無標の格である主格を受け取ることになる。

例えば、(29)のような結合対象と同じ格を示している場合、(31)によって定義される結合領域内にある可能な結合対象として、 $[_{NP}я]$ と $[_{NP}тебя]$ があるが、この場合は *тебя* が選ばれている¹¹。そして、そこから対格を受け取って *брата* は対格形を示しているのである。

一方、(30)のような結合対象の格に関わらず主格を示している場合は以下のような構造をなしていると考えられる。



ここで、考えられる結合対象は $[_N ученика]$ となるが、この場合(33)により格を受け取ることができない。従って、格を与えられないので、無標の格である主格を付与されるのである。

Rapaport (1986) は結合対象から格を受け取る手段は明示的に示したが、それ以外の場合は無標の主格を受け取る、とのみ(33)に記しているに過ぎない。では、(1)及び(3)の考え方で、この主格の現象は説明できるのであろうか。

¹¹ もちろん、主格のを結合対象として選んだ場合、

Я люблю тебя, как брат.
I-NOM. love you-ACC. as brother-NOM.

「私はあなたを兄弟が愛するように愛している。」

となり、*брат* は結合対象を通じて主格を与えられるが、これも適格文である。

Chomsky (1981) の考え方(1)では名詞句に主格を与えるためには、その名詞句がAGRによって統率されていなければならないとされる。この場合、 $[_{NP}ON]$ はそのような統率を受けていない。従って、ここでの主格の付与を説明することはできない。

また、Babby (1986) の考え方は、もし前置詞 *как* を語彙範疇であると考えたと問題が出てくることになるが、仮にそうでないと考えれば $[_{NP}ON]$ はいかなる語彙範疇にも統率を受けていないことになる。従って、主格の付与を正しく説明していると考えられる。

2.1.5. 引用形

引用形 (citation form) は通常、主格で現れる。これは引用形が他の形式と異なり、文のシンタックスからはずれた要素であり、それ自体が何らかの障壁をなし、動詞などによる統率を阻止しているからであると考えられる。

通常の引用形の他にも引用形と考えるとうまく説明が付く現象を示すものに「呼称の動詞 (глаголы называния)」がある。これは「呼ぶ」や「呼ばれる」といった意味を表す動詞のことであり、これらの動詞の対格補語や主格補語は主格形で現れることがある。

- (35) Ее сестра звалась Татьяна.
her sister-NOM. was called Tat'jana-NOM.

「彼女の姉はタチヤナと呼ばれていた。」

ただし、主格のみならず、造格が与えられることもある。

- (36) Она звалась Татьяной.
she-NOM. was called Tat'jana-INS.

「彼女はタチヤナと呼ばれていた。」

すなわち、呼称の動詞という、言語の形式そのものに注目がおかれやすい動詞で、補語が引用形であると解釈された場合そこに本来の造格と異なる主格が与えられるわけである。

さて、それではこのような引用形に上述の格付与規則(1)と(3)は正しく主格を与えることができるであろうか。まず第一に、Chomsky (1981) による(1)

であるが、これはうまく説明することができない。引用形が障壁をなすと考えれば AGR による統率は阻止されてしまうので、主格が付与されないし、また、そもそも(35)の *Татьяна* のような位置にあったら障壁が無くても AGR に統率されることはあり得ないのである。

それに対して Babby (1986) は自身が指摘しているように、障壁のことさえ念頭に置けば何ものにも統率されることがないこのような引用形の主格を正しく説明することができる。

2.1.6. 呼格名詞句

現代ロシア語では呼格は失われており、そのような役割を果たす名詞句は主格で現れる。このような「呼格的」名詞句は文のシンタックスからはずれたものであり、いかなる範疇にも統率されることがないと考えられる。と、すれば Babby (1986) はその主格の付与を正しく説明していることになり、その反対に Chomsky (1981) は説明できていないことになる。

ただし、現代ロシア語に本当に呼格が無いのかどうかは慎重に判断しなければならない問題である。様々な方言に呼格が保存されていること (Голубева 1995 参照) は別にしても、標準語の話し手においても、*-а* や *-я* で終わっている名詞が「呼格的」に用いられる場合、末尾の母音を脱落させることがある。

(37) 「ニーナ (女性名)」 → Нин!

「コーリャ (男性名)」 → Коль!

「お母さん」 → мам!

これは比較的新しく成立した現象で、Comrie (1996: 132) によれば、革命前から見られるものの、広範囲に用いられるようになったのはここ 50 年以内のことであるとされる。

この新しく生まれた形式を 1 つの格と考えるか、あるいはそれ以外の何かと考えるかは慎重さを要求する問題である。ちなみに、Yardoff (1996) はこのような「呼格」名詞は主格形の音韻論的な縮約形に過ぎず、独立した格とは認めていないが、その一方で Comrie (1996) はこの形式に関する記述を

Changes in Case Endings 「格語尾の変化」という節の中にもうけ、格としてとらえていることを伺わせている。もし、仮に呼格が現代標準ロシア語に存在するとしたら、それは意味格 (semantic case) の一つであると思われるが、その場合は、本稿における議論の対象から呼格がはずれることになる。

2.1.7. ЭТО

指示代名詞 *этом* 「この」の中性・主格形である *это* を用いる構文の1つに次のようなものがある。

- (38) Это была школа.
this-NOM.N. be-PA.F. school-NOM.F.

「これは学校だった。」

このような *это* は連結動詞 *быть* と主格述語を先導する主語である、と伝統的にしばしば考えられている (例えば、Розенталь 1984, Виноградов 1972, Barnetová 1979 等を参照)。しかし、例文のグロスにも示したように、動詞はこの場合主語と考えられている *это* ではなく述語と考えられている *школа* と一致を行っている。このことから、*это* が主語であるという考えには疑問が生じることになる。例えば、Падучева (1981) はこのタイプの文に対して「主語」とか「述語」といった従来の用語を使うことを慎重に避けている。それでは、この *это* は何なのであろうか。

同じ *это* を用いる構文として以下のようなものがある。

- (39) Это птицы летят.
this-NOM.N. bird-NOM.PL. fly-PR.3.PL.

「鳥が飛んでいるのです。」

ここでの *это* は動詞価からは完全にはずれたものであり、山崎 (1990: 46) によれば「題目に対する解説部 (述語部) を先導する働き」があり、直後に置かれる要素をフォーカスとする一種の強調構文であると考えられる。

匹田 (1996) はいくつかの根拠にもとづいてこれら2種類の *это* を同一のものであると考えられることを指摘した。その理由は概略以下の通りである。

- i) どちらの *это* とも主動詞との一致を行わない。(39)のような一般の動詞

文を先導するものは文のシンタックスからはずれた要素であり、他に主格主語が存在しているわけだから、当然主動詞と一致することはあり得ない。また、(38)のような連結動詞を先導するものも一般に主語と考えられているにも関わらず、一致を行うことがない。一致するのは主格述語と考えられているものの方である。

ii) どちらも機能的な観点から見るとトピックの役割を果たしており、またそのことからトピックの位置、すなわち、フォーカスを先導する文頭の位置に厳しく制限されている。

(40)

- a) Это ϕ Таня.
this-NOM. be-PR. Tanja-NOM.

「これはターニャだ。」

- b) *Таня это.

(41)

- a) Это птицы летят.
this-NOM. bird-NOM.PL. fly-PR.3.PL.

「鳥が飛んでいる。」

- b) *Птицы это летят.

- c) *Летят это птицы.

- d) *Птицы летят это.

- e) *Летят птицы это.

- f) Это летят птицы.

iii) どちらも通常文頭の位置に制限されてはいるものの、疑問詞やある種の副詞なら *это* に先行することができる。

- (42) Кто это пришел?
who-NOM. this-NOM. come-PA.M.

「誰が来たのですか？」

- (43) Кто это?
who-NOM. this-NOM.

「これは誰ですか?」

- (44) Наверное, это фашист.
probably this-NOM. Fascist-NOM.

「たぶんそれはファシストだ。」

- (45) Естественно, это птицы летят.
naturally this-NOM. bird-NOM.PL. fly-PR.3.PL.

「当然飛んでいるのは鳥だ。」

iv) どちらも従属節に現れることができるが、関係詞節には現れられない。

- (46) Я знаю, что это нашу книгу они
I-NOM. know that this-NOM. our book-ACC. they-NOM.
читают.
read-PR.3.PL.

「彼らが読んでいるのは我々の本だということを私は知っている。」

- (47) Я знаю, что это школа.
I-NOM. know that this-NOM. school-NOM.

「私はこれが学校だということを知っている。」

- (48)* Вот идет профессор, который это
here go-PR.3.SG. professor-NOM. which-NOM. this-NOM.
кафедрой русского языка хорошо руководит.
chair-INS. Russian language-GEN. well lead-PR.3.SG.

「*うまく指導しているのがロシア語講座である教授が歩いている。」

- (49)* Я очень интересовался книгой,
I-NOM. very be interested-PA. M. book-INS.F.
которая была это.
which-NOM.F. be-PA.F. this-NOM.

「*私はこれである本に大変興味がある。」

匹田(1996)では、(38)のように *amo* によって先導される連結動詞と主格名詞句は以下のような名詞文 (номинативное предложение) であると考えられると結論付けた。

- (50) Была весна.
be-PA.F. spring-NOM.F.

「春だった。」

また、*amo* は完全な文のさらに外にあるわけであるから、最低でも節を支配する最初の S よりは上にあることになる。すると、Chomsky (1981) の考え方では、一致に関する(8)にそもそも矛盾が生ずるし、仮に(8)を考慮に入れず、一致の理論的な問題を考慮しないとしても、S より上にある *amo* を AGR は統率することはなく、従って主格を与えることもできない。それに対して、Babby (1986) による(3)ではこのような *amo* も、それがいかなる語彙範疇にも統率されていない以上、矛盾無く主格を与えることができることになる。

以下の(51)は今までに出てきた2つの主格の付与規則(1)と(3)がどの程度実際の現象を正しく説明しているかを示した表である。「+」は正しく説明していることを、「-」は説明できていないことを示す。また、Chomsky (1981) による規則(1)の中に「+/-」とあるのは、一致に関わる規則(8)をそれぞれ考慮に入れない場合と入れた場合である。

- (1) NP is nominative if governed by AGR.
(3) A noun phrase that is *not* governed by a lexical category is assigned the nominative case.
(8) AGR is coindexed with the NP it governs.

(5)

	(1)	(3)
主格主語	+/-	+
主格述語	+/-	+
左方転移化要素	-	+
<i>как</i> の補語	-	+
引用形	-	+
呼格名詞句	-	+
<i>эмо</i>	-	+

2.2. 排除されるべき名詞句

前節までにロシア語に見られる主格名詞句を概観し、それらを Chomsky (1981) で提案された規則(1), 及び Babby (1986) で提案された規則(3)が説明できているかを見た。

(1) NP is nominative if governed by AGR.

(3) A noun phrase that is *not* governed by a lexical category is assigned the nominative case.

それによると、Chomsky (1981) の(1)は主格主語と主格述語に与えられた主格は説明できるものの、それ以外の主格名詞句は説明不可能であり、またそれら二つの主格名詞句でさえも、一致と主格付与を同一視する(8)を考慮に入れると矛盾が生じることがわかった。

(8) AGR is coindexed with the NP it governs.

それに対して、Babby (1986) の(3)は全ての主格名詞句に正しく主格を与えることができ、申し分ない規則であるように見える。

しかし、以下の節に見るように主格を与えられてはいけぬ名詞句を見るとこの規則は「強制過ぎる」ことがわかる。以下の節では主格を与えられてはいけぬ名詞句、すなわち、非定動詞の主語を概観し、それを正しく説明するために Babby (1986) で提案された規則(3)に修正を加えることにする。

2.2.1. 非定動詞の主語

Babby (1986) の規則(3)は、Chomsky (1981) による従来の主格付与規則

(1)が説明しきれない現象をも説明できることを目的として提案されたものであった。しかしながら、Babby (1986) は従来 Chomsky (1981) によって説明できていた現象をかえって説明できないと言う矛盾をかえって生み出すことになってしまう。それが非定動詞の主語に対する格付与である。

英語同様、ロシア語も不定動詞 (infinite verb) の主語に主格が与えられることはない。それ故、不定動詞の主語の位置には PRO が置かれる。

- (52) Я хочу [PRO читать книгу].
I-NOM. want-PR.1.SG. read-INF. book-ACC.

「私は本を読みたい。」

そして、不定動詞の主語が主格形で顕在的に現れた場合、それは非文となる。

- (53)* Я хочу [я читать книгу].
I-NOM. want-PR.1.SG. I-NOM. read-INF. book-ACC.

ところが、この現象、Chomsky (1981) の(1)ではきれいに説明がされているが、Babby (1986) による(3)は説明できない。

- (3) A noun phrase that is *not* governed by a lexical category is assigned the nominative case.

この考え方で行くと、不定動詞の主語も同様に語彙範疇に統率されていないわけだから主格を与えられ、(53)が適格文であるという予測がされてしまう。

また、これはいわゆる不定動詞のみならず、非定動詞 (non-finite verb) であれば全てに共通して言えることである。

(54) 形動詞節

- Наташа любит мальчика, [PRO/*он
Natasha-NOM. loves boy-ACC. he-NOM.
читающего свои книги].
read-ADJPART. self's book-PL.ACC.

「ナターシャは自分の本を読んでいるその少年を愛している。」

(55) 副動詞節

Ваня ушел, [PRO/*он читающего
 Vanja-NOM. go away-M.PA. he-NOM. read-ADVPART.
 совою книгу].
 self's book-ACC.

「ワーニャは自分の本を読み終わると行ってしまった。」

このような現象を説明するには、Babby(1986)の提案(3)に対して何らかの修正を加える必要がある。

要するに、Babby(1986)は主格を無標の格としてとらえているわけであり、この点では例えば、Babyonyshev(1993)やRappaport(1986)等と同じ考え方である。しかし、無標とはいっても、完全に無標であるわけではない。すなわち、この捉え方では「強すぎる」わけである。そのため、ここでは無標の格、という考えに若干の制限を加えることが必要となると考えられる。それには以下のようなものが考えられる。

(56) いかなる語彙範疇にも統率されない名詞句は、INFL [-finite] に統率されていない限り主格を付与される¹²。

すなわち、INFL [-finite] による統率を主格の付与を阻止する条件と考えるわけである。

以下は上で示した表(51)にさらにここで提案した規則(56)と、主格を与えられてはいけない名詞句もそれぞれが正しく説明できているかを加えたものである。

¹² INFL の素性にこのようなものを考えるべきかどうかは当然議論が必要であるが、ここでは便宜的に [±finite] を想定する。

(57)		(1)	(3)	(56)
主格を与えられるべき名詞句	主格主語	+/-	+	+
	主格述語	+/-	+	+
	左方転移化要素	-	+	+
	<i>как</i> の補語	-	+	+
	引用形	-	+	+
	呼格名詞句	-	+	+
	<i>это</i>	-	+	+
主格を与えられてはいけない名詞句	非定動詞の主語	+	-	+

主格主語は INFL によって統率は受けているものの, [+finite] なので主格が正しく与えられる。主格述語も同様である。左方転移化要素はそもそも INFL によって統率を受けていない位置にあるので主格が与えられる。*как* の補語, 引用形, 呼格名詞句, *это* も同様である。非定動詞の主語は [-finite] の INFL によって統率されているので, 主格を与えられることはない。

このように, 全てを説明するためには(56)のような無標格に対する阻止要因を考える必要があることがわかる。

3. 残された問題点～連結動詞 *Быть* をめぐって

前節までで様々な主格を与えられる名詞句と主格を与えられてはいけない名詞句を考察し, それをもとに新たな主格付与規則を提案した。しかしながら, まだ残された問題点は多い。その問題点はもっぱら連結動詞 *быть* に集中している。以下ではそれらの問題点を考察する。

3.1. 連結動詞の主格以外の述語

連結動詞 *быть* の述語は必ずしも上で示した格ばかりで現れるわけではない。次のように様々な格で現れることが可能である。

(58) *В центре города я видел красивую машину.*

「都心で私は美しい車を見かけた。」

Машина была Сергея.
car-NOM.F. be-PA.F. Sergej-GEN.

「その車はセルゲイのだった。」

(59) Я нашел письмо.

「私は手紙を見つけた。」

Письмо было Ивану.
letter-NOM.N. be-PA.N. Ivan-DAT.

「手紙はイワンへのものだった。」

(60) Он руководил разными рабочими движениями.

「彼は様々な労働運動を指導した。」

Самое удачное руководство было нашим
most successful leadership-NOM.N. be-N.PA. our

движением.
movement-INS.

「もっとも指導がうまくいったのは我々の運動に対してだった。」

このような主格以外の名詞句はいかなる要素にも統率されているとは考えられない¹³。このような場所にも主格を与えることを阻止しないと、格の衝突 (case conflict) が生じることになる。

これに対する解決策となる考え方を Babby (1986) が提案している。それは格付与に階層関係を導入するのである。Babby (1986: 203) が示す階層は以下の通り¹⁴：

(61) 語彙格 (Lexical Case) > 意味格 (Semantic Case) > 数量詞句の生格 (GEN (QP)) > 構造格 (Configurational Case)

この図式で、より左にある格の付与は右にある格の付与よりも優先される。

¹³ もちろん、これらの格はどのようにして与えられているのかを詳しく議論する必要性は残る。

¹⁴ 部分生格と否定生格は意味格とされ、それ以外の生格は構造格になる。

こうすれば、構造格である主格の付与よりそれ以外の格の付与が優先され、格の衝突は起こらないことになる。

ただし、この考えにも問題は生じる。まず第1に、上で示した例文(58)の生格述語はどうするべきか。Babby(1986)の階層(61)ではこのような所有者を示す生格は構造格であると考えているが、それでは主格との間に格の衝突が生じてしまうし、そもそもここに生格を与える要素はどこにもない。確かに、主格と同様に構造格であると考えられる対格はこの位置にあると格を与えるものがないので非文となるが、このことは正しく予告されている。

(62) *Она вчера всю ночь читала книгу.*

「彼女は昨日一晩中本を読んでいた。」

*Чтение было эту книгу.
reading-N.NOM. be-N.PA. this book-ACC.

「読んでいたのはこの本だった。」

しかし、同じ構造格であるはずの生格ではなぜ与える要素が存在しないのに可能なのか？ 格の分類と階層の見直しが必要である。

第2に、上で示した例文(59), (60)に見られる与格と造格はBabby(1986)では語彙格とされているが、語彙格が与えられるためには、その名詞句を統率する要素が必要である。しかし、ここにはいかなる要素も存在しない。場合によってはこれらは意味格に入れるべきなのかもしれない。いずれにせよ格の分類と階層の見直しが必要である。

第3に、この位置に現れられるのは名詞句だけではなく、前置詞句や副詞句も可能である¹⁵。

(63) *У него была красивая машина.*

「彼はきれいな車を持っていた。」

¹⁵ 動詞 *быть* が存在の意味を持っていると考えられるものはまた別の話と考えられるのでここでは示さない。

Машина была для путешествия.
car-NOM.F. be-PA.F. for journey-GEN.

「その車は旅行用だった。」

- (64) Товары были нарасхват.
goods-NOM. be-PA.PL. selling well

「商品は引っ張りだこだった。」

これが認められるのと、なぜ同じ主格主語の位置に前置詞句がある(65)が認められないのか、という問題が生じる¹⁶。

- (65)* У него имело хорошую машину.
at him have-PA.N. good car-ACC.

「彼は良い車を持っていた。」

- (66) У него была хорошая машина.
at him be-PA.F. good car-NOM.F.

「彼は良い車を持っていた。」

3.2. 連結動詞 *БЫТЬ* の時制をめぐる特殊な性質

連結動詞 *быть* は2.1.2.で論じたような述語の主語的な性質の他にも様々な特殊な性質を持っている。そのことが全て解明されない限りはこの問題に本当に決着をつけたとは言えないであろう。以下で連結動詞 *быть* が時制に関して示す「特殊性」を概観する。

第1に、連結動詞 *быть* は通常、現在時制において、顕在化せず ϕ となる。

- (67) Я ϕ студент.
I-NOM. be-PR. student-NOM.

「私は学生だ。」

¹⁶ ロシア語の文が、単なる省略ではなく主格主語がない場合「無人称文 (безличное предложение, impersonal sentence)」と呼ばれ、動詞は中立的な3人称・単数・中性の形をとる。

- (68) Мы ϕ японцы.
we-NOM. be-PR. Japanese-NOM.PL.

「我々は日本人だ。」

ある種の環境に置かれたとき、*есть* という形であらわれることもあるが¹⁷、その場合、ロシア語のような動詞の活用が複雑な体系をなしている言語には異例といってもいいことに、人称・数などで一切の活用を行わない。

- (69) Человек есть тайна.
man-NOM. be-PR. mystery-NOM.

「人間とは謎だ。」

- (70) Кто ты есть?
who-NOM. you-NOM. be-PR.

「君は誰だ。」

例(69)の主語は *человек* であり、動詞が一致するとしたら 3 人称単数形になるはずである。また、(70)では *ты* が主語なので、動詞は 2 人称単数形になることが予想される。が、いずれの場合も全く同じ形を示している。

ひょっとすると通常現在形と考えられている ϕ の形はそもそも何も存在せずに、あるのはトピック・コメントという関係のみが存在しているという推測も可能なのかもしれない。

また、ロシア語の動詞は通常、過去と非過去の 2 項対立をなしているが、仮に ϕ /*есть* が一般に考えられているとおりの *быть* の現在時制形として確かに存在しているものと考えれば、*быть* の時制は例外的に現在・過去・未来の 3 項対立をなすことになる。

- (71) *читать* 「読む」

非過去時制：читаю, читаешь, читает, читаем, читаете, читают

過去時制：читал, читала, читало, читали

¹⁷ 概略、動詞がフォーカスの中に入っている場合に現れると言える。

(72) *быть*現在時制： ϕ /есть

過去時制：был, была, было, были

未来時制：буду, будешь, будет, будем, будете, будут

このことも奇妙な現象である。

また第2点として、通常不完了体動詞は非過去の活用を行ったとき、意味的には現在のことを示し、完了体動詞は未来のことを示す。

(73) *читать* 「読む」(不完了体)

Я сейчас читаю эту книгу.
I-NOM. now read-PR.1.SG. this book-ACC.

「私は今この本を読んでいる。」

(74) *прочитать* 「読む」(完了体)

Я завтра прочитаю эту книгу.
I-NOM. tomorrow read-FU.1.SG. this book-ACC.

「私は明日この本を読んでしまうだろう。」

それにも関わらず意味的には当然不完了体動詞と考えられる連結動詞が非過去の活用、すなわち、不完了体動詞が現在の出来事を示すのに用いられる活用と同じ活用を行うと未来のことを表す。

(75) *Завтра будет понедельник.*
tomorrow be-FU.3.SG. Monday-NOM.

「明日は月曜日だ。」

これもまた奇妙な点である。

第3点として、主格述語をとるのはもっぱら現在時制の場合が主で、過去、未来の場合には次第に用いられなくなって、造格が好まれる傾向にある(Comrie et al 1996)。事実、今回インフォーマントをお願いした方は過去時制、未来時制における *быть* とともに用いられている主格述語はことごとく非文と判断された。しかし、現在時制の場合は逆に、主格述語のみ現れ、造格述語は現れることが決してない。

以上3点の奇妙な特徴は *быть* の性質を考える際に大きな問題となるが、ロシア語の主格名詞句の問題を全て解決するためにはこれらを説明しなければならぬのも事実である。

4. 終わりに

以上、本稿ではロシア語に現れる様々な主格名詞句の性質とそれらに主格を与えるための主格付与規則を考察した。

第1節では、今までに提案された2つの主格付与規則を Chomsky (1981) と Babby (1986) から紹介した。

第2節では、ロシア語に見られる主格を与えられなければならない名詞句と与えられてはならない名詞句の諸性質を見ながら、先行の2つの主格付与規則を吟味し、その結果、どちらもそれぞれに説明が付かない現象を残していることが明らかになった。そこでそれらが説明できなかつた現象を全て網羅的に説明するために(56)を提案した。

(56) いかなる語彙範疇にも統率されない名詞句は、INFL [-finite] に統率されていない限り、主格を付与される。

ただし、連結動詞 *быть* の性質をめぐって、多くの説明されない点が残るのも事実である。この問題は、第3節で扱った。今後は、それらの残された問題の解決を目指さなければならない。

参考文献

- Babby, L. (1980) *Existential Sentences and Negation in Russian*, Karoma.
- _____, (1986) "The Locus of Case Assignment and the Direction of Percolation: Case Theory and Russian", in Brecht and Levine (1986).
- Babyonyshev, M. (1993) "Aquisition of the Russian Case System", in C. Philips (ed.) *Papers on Case & Agreement*, II, MIT Working Papers in Linguistics, vol.19.
- Barnetová, B., H. Běličová-Křížková, O. Leška, Z. Skoumalová and V.

- Straková (1979), *Русская грамматика, Academia*.
- Brecht, R. D. and J. S. Levine eds. (1986) *Case in Slavic*, Slavica.
- Chvany, C.V. (1975) *On the Syntax of BE-Sentences in Russian*, Slavica.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.
- _____, (1993) “A Minimalist Program for Linguistic Theory”, in K. Hale and S. J. Keyser (eds.) *The view from Building 20*, The MIT Press.
- Comrie, B. (1973) “Clause Structure and Movement Constraints in Russian”, in Corum, Smith-Stark & Weiser (eds.) *You Take the High Node and I’ll Take the Low Node*, CLS.
- Comrie, B., G. Stone, M. Polinsky (1996) *The Russian Language in the 20th Century*, Oxford.
- Hikita, G. (1992) “Extrapolation of Elements Out of Some Syntactic Categories in Russian”, *Gengo Kenkyu*, vol.102.
- Rappaport, G.C. (1986) “On the Grammar of Simile: Case and Configuration”, in Brecht and Levine (1986).
- АН СССР (1970) *Грамматика современного русского языка*, Наука.
- _____, (1980) *Русская грамматика*, в 2 тт., Наука.
- Виноградов, В. В. (1972) *Русский язык (грамматическое учение о слове)*, издание второе, Высшая школа. (originally published in 1947)
- Голубева, Н. Л. (1995) “Средства выражения значения вокатива”, *Восточнославянские изоглоссы*, 1995, Наука.
- Земская, Е. А. ред. (1973) *Русская разговорная речь*, Наука.
- Иомдин, Л. Л. (1990) *Автоматическая обработка текста на естественном языке: модель согласования*, Наука.
- Кохтев, Н. Н. и Д. Э. Розенталь (1984) *Популярная стилистика русского языка*, Русский язык.
- Падучева, Е. В. (1981) “Местоимение *это* с предметным антецедентом”

Проблемы структурной лингвистики 1979, Наука.

Розенталь, Д. Э. (1984) *Современный русский язык*, Высшая школа.

匹田剛(1993)「ロシア語における2つの統語的トピックについて」、『人文研究』, 小樽商科大学。

_____, (1994)「連結動詞 *быть* の主格述語名詞句についての覚え書き」, *Language Studies*, 小樽商科大学言語センター。

_____, (1995)「ロシア語における主語・動詞の一致と主格の付与をめぐって」, 『人文研究』, 小樽商科大学。

_____, (1996)「ロシア語における連結動詞と主格名詞句を先導する *это* をめぐって」, 『人文研究』, 小樽商科大学。

山崎紀美子(1990)『ロシア語の構文』, くろしお出版。